2022年8月7日（聖霊降臨後第9主日、特定14、C年）

牧師メッセージ

「小さな群れよ、恐れるな」

（ルカによる福音書12:32-40）

司祭ヨセフ太田信三

ルカによる福音書の第9章から始まった主イエスのエルサレムへの旅。すなわちご受難への旅が進むにつれ、弟子たちは今後のことを心配し、恐れを感じ始めています。師である主イエスの立場のみならず、自分たちの立場も危うくなるかもしれないという恐怖が大きくなってきています。その弟子たちに向かって、主は「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」と言われました。

神の国こそ、わたしたちクリスチャンの目的地です。しかし目的地は分かっていても、道をそれてしまうのが人間の弱さ、罪というものです。「あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心があるのだ」と主イエスは言われましたが、どうしても人間は「恐れ」のなかで安心や保証を求め、目に見える富に心を注いでしまうものです。先週の福音で「愚か者」とされた人もそうでした。また、戦争を繰り返す愚かな人間の根底にも、この「恐れ」があるように思われます。主イエスは「目をさましていなさい」と言われますが、目を覚ましていることなど人間にはできないのです。しかし、主イエスはその人間の弱さを心底ご存知です。だからこそ今日もまた、たとえ話しによって弟子たちに神の国を明らかにされるのです。そこに希望、喜びがあるから、恐れなくても大丈夫だと伝えてくださるのです。

今日のたとえ話しの後半では、主人自らが腰に帯をしめ、僕たちを席に着かせ、そばに来て給仕をすることが語られます。この食卓こそ、来るべき神の国の光景です。主の給仕のもとで真の喜びに与るこの食卓のなんとすばらしいことか。もしも主人が必ず帰ってくるとわかっているなら、さらに、その主人が帰ってきたときには最高の食事が待っていることを確信しているなら…その帰りが待ち遠しくてしかたがないはずです。神こそ、この主人です。神ご自身がこの喜びの時を用意し、約束してくれているのだから、「恐れるな」と、主イエスは言うのです。

「目を覚ましていなさい」という言葉だけ聞くと、それはただ厳しい義務を課されているようにしか感じられないかもしれません。しかし、主イエスは同時にその先の喜びを、希望を示してくださるのです。その希望、喜びの光に照らされるからこそ、わたしたちは恐れの中にあっても、歩み進めることができます。「小さな群れよ、恐れるな」という力強い励ましの言葉の裏には、神にある喜びへの主イエスの確信と、信仰の真実があるのです。